

第三回 新しいまちづくりのグランドデザイン策定に向けた有識者懇話会における 各委員の主な意見

○大阪都市圏からみた特徴・役割、めざすべき都市像

- ・めざすべき都市像について、前回の議論の内容が上手く盛り込まれていると思う。特にこのまちづくりの3つの視点は非常にいいと思う。
- ・一方で、基本目標と戦略とが若干繋がっていない部分があるかと思う。このあたりのキーワードを少しずつ盛り込んでほしい。
- ・特に気になるのは、まちづくりの視点の「リソース」に関して、戦略3では自然資源や地域資源の活用を記載しているが、「リソース」では人材が重要だと思う。
- ・今回でグランドデザインの大枠が固まり、パース図も入り、非常にイメージができるものになった。特に印象としてグリーンイメージが強く、大阪の都会と自然との近さを売りに出しているグランドデザインの特徴が視覚的にもすごく分かるものになっている。
- ・めざすべき都市像の3つの基本目標があるが、キーワードが5つの戦略の中ではあまり見当たらないという印象である。
- ・例えば、健康長寿を大きく打ち出しているが、ウォークブルという視点で取り入れられているものの、健康長寿という言葉自体はあまり戦略の方では出てこない。3つの目標と5つの戦略とが、具体的なビジョンとしてどう繋がるかというところをもう少しクロスさせてはどうか。
- ・魅力的な国際都市は拠点、健康長寿は郊外というように、綺麗に分かれすぎているように思うので、もう少しクロスさせるような戦略であってほしい。
- ・考え方や事業そのものが画期的であるというものを、何か打ち出してもよい。例えば、日本一の水門が3つできるというようなことを強く出していくことでエッジが効く。
- ・「はじめに」は書きぶりを再考してほしい。従前何が課題で、それをどう乗り越えていくのか、今後我々がどのように変化していくのかという視点を入れた方がよい。今は、めざすまちの姿が書かれているが、やはり現状の課題をふまえた上で2050年の目標を書いた方がよい。
- ・例えば、万博のレガシーを活かすというような視点や、SDGsも2030年で達成してしまうので、SDGsの後の考え方、Society5.0も達成後なので、Society5.0の技術の前提のもとで何かその先のことを考えるというようなことも、「はじめに」の部分などで示すべきかと思う。2025年までと、その先の2050年とで書き方の区別が必要かと思う。
- ・めざすべき都市像で、健康長寿のところは、現在デジタル庁がリバブルウェルビーイングシティ(LWC)の指標というのを示すということで、様々なところでウェルビーイングについて議論されている。ウェルビーイングという言葉をやっと取り込むべき。

- ・まちづくりの視点の3つのキーワード、「ダイバーシティ」「コ・クリエーション」「リソース」について、この3つでいいのか。おそらく、レベルがそれぞれで違うので、特にリソースは日本語で資源の活用になっているが、リソースというと資源なので、コ・クリエーションとは揃わない。言葉のレベルを揃えながら、ウェルビーイング等がこれから重要なワードになるのであれば、含めるべき。人中心（ヒューマンセントリック）という言葉があれば、この先にも効いてくるのではないか。
- ・リソースについては、大阪は非常に歴史の長いまちなので、様々な歴史的資源、文化資源等の古くからの歴史資源も含めて、各々の戦略に少しずつ記述できればよい。
- ・ストックを活用するとともに、都市はフローに対応して展開していくということも重要。それが次のストックになっていくというような、資源を作っていくという観点もあるだろう。
- ・経済の部分はサーキュラーエコノミーの記述があるが、同様に、文化資源や人材も絶えず、循環するというようなイメージがあればと思う。
- ・空間的な広がりがある拠点作りを打ち出しているが、2050年という長期に向けたベクトルも重要であるため、過去から現在の大阪のリソースや、歴史的な背景も盛り込めるとよい。
- ・「大阪の食を支える」といった農業や漁業の位置づけを高める記述を追加してはどうか。

○戦略1) 成長・発展をけん引する拠点エリアを形成

- ・北部大阪中枢エリアや東部大阪、南部大阪、京阪神都市軸活性化エリアというような形で、円で囲っている。バランスよく拠点を配置するという意味ではこの形で構わないが、都市化すべきではないエリアも含まれているため、各々のエリアの中でメリハリを付ける必要がある。
- ・各自治体では総合計画を策定しているので、それと矛盾するわけにもいかないが、総合計画以上の新しいアイデアが複数の自治体が関与することで生じる、ということを示すことについて検討が必要。ただ、エリアの考え方や位置づけについて、もう少し説明を追加すべき。

○戦略2) 大阪ならではの魅力を活かし、暮らしやすさ No.1 都市を実現

- ・テクノロジー×地域資源×共創という3つのキーワードが、まちづくりの3つの視点（ダイバーシティ、コ・クリエーション、リソース）のキーワードと少し似ていると思う。テクノロジーだけが違っているが、この技術というのはもちろん非常に重要な要素のひとつである。技術の活用に関する記述を少し加えてほしい。

○戦略4) 人・モノ・情報の交流を促進

- ・人中心の快適で魅力ある空間の創出のところで、なんば駅周辺と御堂筋が挙がっているが、堺のことが書けないか。環濠の水辺空間の活用もあるし、フルモールとまではいかないがSMIラインもある。大小路の歩道空間を活性化していくということもある。御堂筋だけでなく大

阪中に人中心の取り組みが展開されているということがわかるとよい。

- ・日本の商店街はもともとウォークアブルであり、自動車の制限速度を落として歩車融合というの
も、歩道を作れなかったところでは結構うまくできているところもある。既存のものが魅力的で
あるという事例等があってもいいのかもしれない。あるいは、駅前デッキの魅力あるものは、再
魅力化すれば最先端のウォークアブルな空間が実現できるというようなことも記述できればよ
い。

○戦略5) 安全・安心でグリーンな社会を実現

- ・みどりに関しては、魅力あふれるまちづくりが大事ということで、「支える」部分に入っているの
はよいと思う。
- ・近年、まちなかのみどりについて、治水対策・流域治水に対して、しきりに議論をされていると
ころであり、防災機能のところで、みどりが流域治水を支えるという言葉を入れてほしい。
- ・大阪城公園やてんしば、高槻の安満遺跡公園等の都市公園について、Park-PFI を利用した
都市公園の創造という記述を追加してもよい。
- ・難波宮跡公園が大きくクローズアップされているが、そこに都市公園の創造について総括的
に記述するとよい。
- ・Park-PFI はひとつの手法で、田畑も同じみどりであり、なんば駅前をはじめ、あらゆる場所
で広場化や公園化していくという言葉で記述すればよい。
- ・例えば、大阪ビジネスパークでは、大街区でゆとりのあるスペースを作り、民間の取り組みでは
なんばパークスで屋上緑化という斬新なことを行い、大阪アメニティパーク、大阪ガーデンシテ
ィなど、再開発をする度に緑のあるオープンスペースを増やしてきた。それがグランフロントに
繋がっているというような流れで整理をしたい。それを継続し、ますますみどりのある都心部を
作るというようなことが、目玉のひとつになればよい。

○グランドデザインの推進に向けて

- ・まちづくりに関わる様々な主体の役割連携というところでは、官民連携や公民連携は記述す
べき。
- ・都市計画の役割分担は、地方分権によって基本は市町村が主体ということになっているが、
規模の小さい市町村にまで権限移譲するのは、市町村の規模、人材、財政的な能力という意
味でもなかなか難しいのが現状。広域圏という一つの塊の中で、小さな市に対しては府では
なくその広域圏の代表である中核市が行うこととし、そのための権限を市から中核市に移譲
することも可能ではないか。
- ・地方分権以降、都市計画が市町村に権限移譲したということであるが、それでも広域的に考

えなければならぬ都市計画、例えば大規模商業施設の立地では、一つの市町村がすごく頑張っても隣接市町がそういうことに非協力的だと、全体として頑張った市町村の中心市街地が衰退するというのはよく知られていることかと思う。そういうことにならないように、そこは市町村ではなく、大阪府で、手法はいろいろとあると思うが必ず関与はしていくべき。

- ・奈良県が小規模な市町村に対して、様々な分野で市町村に関与している。事例として参考になると思う。
- ・まずは、分かりやすく現状を書いたうえで、変えるべき方向性を考えないといけない。
- ・ランドデザインが策定された後に、方向性や目標に対して、タイミングをみながら、進捗状況を確認していく必要がある。想定した方向性に向かっているかを確認する場や、Web ベースの報告の場が必要。
- ・ウェルビーイングは定性的なものであるが、可能な限りトレースしていくことが必要。
- ・トレースの際は、事業の進捗ではなく、その事業がめざすところを評価するという観点からみるとよい。
- ・SDGs もおそらく計画の途中であり、次の概念が示されるのが 2026~2028 年辺りかと思われるため、途中で新たな概念を盛り込むようなこともあるかと思う。
- ・まちづくりに関わる主体、役割連携は書けるかもしれないが、その推進体制や推進のための仕組み作りは、ケースバイケースだと思う。そこは書かずに、PDCA に近いような検証の仕組み・モニタリングの仕組みということについては書いておく、ということも考えられるのではないか。
- ・今回のランドデザインが新しい組織となって初の中長期の構想であるということを強く打ち出すことにより、多様なステークホルダーと共に成し遂げるということも具体的に書かずとも、打ち出すことになろうかと思う。
- ・規制緩和について考えておくべきことは、郊外では容積率に対するインセンティブでは動かないということ。そのため、容積率以外のインセンティブが必要である。他のインセンティブとして、規制があるため緩和という概念があるという認識のもと、行政がめざす都市像等を実現させるためには、一定規制を強める部分がある一方で、緩和を行うというような条件付きで認めていくことも必要である。
- ・新たな認証制度などは検討しているか。例えば、ニューヨーク市が独自にアクティブデザインの制度を作った。健康に資する都市を構築するべく、アクティブデザインガイドラインに従ったビルに対して認証制度を設けた。新たな認証制度が考えられるかもしれない。
- ・認証で言えば、都市緑化機構が認定している SEGES「緑の認定」(シージェス)というものがある。初期の段階でデザインを認定するということと、維持管理を続けていくことによって上がっていく。作ったときよりもその後のことから始まるということで、仕組みとしては非常に良いと考える。まちづくりも同様であり、作ったときから、何を生み出していくのかということの経年変

化をみて、そのグレードが上がっていくということで民間にとっては良いのではないか。

以上